

行きゆんにや加那

一、行きゆんにや加那

吾きやくとう忘れいてい

行きゆんにや加那

出発ちや出発ちやが

行き苦しや

(スラ行き苦しや)

行くのですか、いい人

私(たち)のことを忘れて

行くのですか、いい人

いやいや、出発はするものの

別れは心苦しく辛いものです

二、目ぬ覚めいてい

夕べいや夜さがてい

目ぬ覚めいてい

吾きや加那思てい

眠ぶららぬ

(スラ眠ぶららぬ)

目が覚めて

ゆうべは一晩中

目が覚めて

私たちはいい人を書いて

眠ることができませんでした

このうたについて

「行きゆんにや加那」は、奄美北部の代表的な島唄だよ。恋人同士の間を歌ったという解説があるけど、亡くなった人への別れを歌ったという解説もあるんだ。即興(ことばのキャッチボール)でも多く歌われ、他にもいろいろな歌詞があるからわすれないでね。本土から流れてきた唄とも言われているよ。



①【にや】

古 【にや】場所・時などに
関して、疑問または反語
を表すことばです。

例 竹取物語(九世紀末頃)
「この女のたばかりにや
負けむ」

変古 【にや】共通語「な」が
変化したとも云われています。

②【加那】

変古 【かな(加那)】「愛し
い人」つまり「恋人」と
「〇〇加那」のように愛
称として当て字で使われ
ることがあるようです。

③【吾】

古 わ【我・吾】自分自身を
さすことばです。男女と
もに用いる。われ。

例 万葉集(八世紀後半)「水
手整へて朝開きわば漕ぎ
出ぬと家に告げこそ」

変古 吾(わ)「きや」一般に奄
美では「きや」をつける
と、私たちと複数形にな
ります。「汝(な)きや」

④【出発ちや】

古 うちたつ【打立】出立す
る。出発する。

例 右京太夫集(十二世紀末
頃)「ここかしこうち
たちたる様など」

⑤【苦しや】

⑥【夜さがてい】

三、行きゆんにや 加那

⑧あがとうしま 彼方ぬ島かち

行きゆんにや 加那

おもかげた 面影立ちゆん時

もと 戻てい来よ

もと 戻てい来よ

四、あんまどじゅう

ながい 長生き しんしよれ

あんまどじゅう

くめいと まめいと 米取て豆取て

⑪ みしよらしゆんど

ちよつとひと休み

「「行きゆんにや加那」の「加那」は「愛しい人」とか「恋人」とのことだよ。「愛加那」は、愛しい「愛さん、いそさん」というように女性の名前のうしろにつけて呼んでいたって。君の好きな人が、舞ちゃんなら舞加那だね。でも加奈ちゃんなら加奈加那になるね。いたずらいたずらケインムン君さぶとん1枚。」



行くのですか、いとしい人

はるか彼方の島へ

行くのですか、いとしい人

私たちの面影に立つ時

戻って来なさいよ

お母さん、お父さん

長生きしてください

お母さん、お父さん

米を取って、豆を取って

食べさせてさしあげますから

⑤【苦るしや】

古 くるし「苦し」その動作をするのが、いやである。

例 万葉集（八世紀後半）「人もなき空しき家は草枕旅になさりてくるしかりけり」

⑦【ぬ】

古 「ぬ」打消を表わすことばです。

例 中華若木詩抄（十六世紀前半頃）「花も去年見しにかわらぬ。人も去年見し人に、かわらぬ」

⑥【夜さがてい】

古 よさり「夜去」夜。夜なか。特に、今夜、今晚を表わすこともありま。

例 竹取物語（九世紀末頃）「さらに、よさりこのつかさにまうで来とのたまうて」

⑧【彼あ】

古 あ「彼」自分からも相手からも遠くはなれているものをさすことばです。

例 竹取物語（9世紀末頃）「あの書き置きし文」

⑨【よ】

古 「よ」感動を表わすことばです。また念を押す気持ちを表わすことばです。

例 今昔物語集（12世紀前半頃）「馬を取て来よと許云懸て」

⑪【みしよらしゆん】

古 めす「召」「食う」「飲む」のていねいな言い方です。めしあがる。

例 徒然草（14世紀前半頃）「朝な朝なめしつる土大根らにさうらふ」

例 「召し上がる」訛って「みしよらしゆん」でしようか。食べさせてあげます。

ながくもぶし 長雲節

一、ハレーイ ながくも 長雲ぬ長さ

ながくもとうげながさか
長雲峠の長い坂も

① しのぎ ハーレ さゆじ坂

つら 辛さをがまんして登るさゆじ坂も

しのぎ ハーレ さゆじ坂 びら

ハレーイ ② かな 加那に思めなすいば

ひと いとしい人のことを思えば

くるま 車 ハーレ とーばる

さとうぐるま 砂糖車を回す平坦な場所のように思

くるま 車 ハーレ とーばる

えて、ちつとも苦になりません

二、ハレーイ にしく はらそうまに

あしはやうま にしくの足早の馬に

しゅぬりぐら 朱塗鞍 ハーレ かけてい

しゅぬ 朱塗りの鞍を掛けて

しゅぬりぐら 朱塗鞍 ハーレ かけてい

ハレーイ ながくも 長雲ばはらし

ながくもさか 長雲坂を走らせて

行けば ハーレ たつこ

たつこ 行けば龍郷だ

行けば ハーレ たつこ

このうたについて

「長雲節」は、北大島では歌あそびの終りの別れ唄といわれているけど、南大島では「祝い歌」で、めでたい時に歌われる唄ともいわれているよ。でも地域によつては、夜中に歌っていけないという伝えもあるんだって。不思議な唄だね。

歌詞は、江戸時代の龍郷のお役人が秋名集落の恋人に会いに行くときのことだよ。



② 【しのぎ(しぬき)】

古

①しのぎ「凌ぎ」苦しみなどをがまんして切りぬけること。

②しんき「心気・辛気」苦しく、つらく感じるさまのこと。

例

①おくのほそ道(1702年)「四面新たに囲みて、麓を覆ひて風雨をしのぐ」

②好色一代男(1682年)「昔、行平何ものにか足さすらせ、しんきをとらせ給ひ」

雑言

【しのぎ】古くは「しぬき」で、古典語「しんき」が変化したとも云われています。



現在の長雲峠

三、ハレーイ 行こ行こにすれば 行こ行こつとすれば

おもかげぬ ハーレ たちゆり 名残惜しいし

おもかげぬ ハーレ たちゆり

ハレーイ 居ろ居ろにすれば 居よう居ようとすれば

ぎりぬ ハーレ たたじ 義理が立たない

ぎりぬ ハーレ たたじ

ちよつとひと休み

長雲峠は、龍郷町嘉渡の川上流から龍郷に通じる旧道だよ。坂がけわしいのと長いので有名なんだ。

「さゆじびら」は、「そじびら」とも言って、龍郷町の嘉渡と秋名の間の坂だよ。

古い歌詞集には「しぬき」(『奄美大島民謡大観』、近年は「しのぎ」と歌われているよ。また、「車とうばる」は、「くうまやとうばる(ここは平坦な場所)」という説もでてきたよ。みんなも調べてみねてね。



②

【加那】

【かな(加那)】「愛しい人」つまり「恋人」と「〇〇加那」のように愛称として当て字で使われることがあるようです。

今から百年ほど前のこと、龍郷の「龍 佐運」という人が、秋名の「きみ加那」に恋して何回も行き来していた時の唄です。

「龍 佐運」は、1854年に薩摩藩から郷土格(ごうどかく)を与えられた人です。

郷土格とは島役人のことで特別に功績のあった人に与えられました。奄美では、名字を名乗ることが禁止されていましたが、郷土格にだけ特別に名字が許されました。当初、二字の名字を与えられましたが、その後一字名字に改姓されています。龍は、もとは田畑の名字でした。



長雲峠で自生する植物

③

【あら・ぬ】

古 (1)「ず」打消し「ず」の連体形「ぬ」で「…ない」「…ぬ。」(2)「あらぬ」ほかの。ちがった。

例 徒然草(14世紀前半頃)「一道に携はる人、あらぬ道のむしろに臨みて」

警告 「ぬ」古典語の打消しの「ず」の連体形「ぬ」を保存しているものです。「わん・や・あらん」「私ではありません」の「あらん」は、古典語「あらぬ」が変化して「あらん」になったのかもしれない。

④

【がなし】

古 かなしい「愛」いとしくてたまらない。また、尊い人や人にとって大切な事物を表わす単語の後ろにつけることばです。

例 万葉集(8世紀後半)「父母を見れば尊く妻子見ればかなしくめぐし」

警告 「加那志」様という尊称。奄美方言の「がなし」は奈良時代の「かなし」とおしい、好きでたまらない、という意味を引きついでいます。

⑤

【な】

古 「な」禁止を表わすことばです。…するな。

例 日本書紀(720年)「水そそぐ鮪の若子を漁り出づな猪の子」

⑥

【思出す】

古 おもい・いだす「思出」忘れていた物事や前にあったことをもう一度思う。

例 発心集(13世紀前半頃)「心に信仰しける時、此の水瓶をおもいだして」

警告 「おもじゃす」古典語「思い・出だす」「おもい・いだす」が訛ったものです。

⑦

【勝てい】

古 まさる「増・優・勝」価値、力量などがすぐれる。他よりもいい状態になる。ひいでる。

例 万葉集(8世紀後半)「銀も金も玉も何せむにまされる宝子に及かめやも」

⑧

【千鳥】

古 ちどり「千鳥」多くの鳥。無数の鳥。

例 万葉集(8世紀後半)「朝獵に五百つ鳥立て暮獵にちどり踏み立て」

⑨

【浜千鳥】

古 はまぢどり「浜千鳥」浜辺に多くの鳥。

例 是貞親王歌合(893年)「はまぢどり秋としなれば朝霧に方まどわして鳴かぬ日ぞなき」

ちよつとひと休み

奄美では、兄弟を「えへり」、姉妹を「うなり」というんだ。「姉妹」が「兄弟」を守るといいう「姉妹神信仰」が盛んなんだ。「かなし」は「大切にいとおいしい」という意味で、姉妹神を敬った言い方なんだ。少しおずかしいけど、がんばれ！

研究している先生の話を紹介するね。

『姉妹神信仰』とはかつて、兄弟が旅に出るとき、姉妹は自分の使っていた手拭いやかんざしを渡したものです。それに付いている霊の力が、兄弟を守護すると考えたからです。本土にも妻や姉妹が、出征兵士に千人針を持たせるといふ風習があったようで、「うなり神信仰」は、日本全体にあったことかもしれない。しかし、南島の「うなり神信仰」は、それが制度化されていたことが一つの特徴です。ノロ信仰がそうです。ノロは、よく「祝女」と当て字されるように村落のまつりごとを司る神女のことですが、人々は女性の霊的能力に期待したのです。そのノロの最高位は、琉球王国の時代、聞得大君でしたが、彼女の主たる職掌が、国家や王の安寧や発展を祈ることだったと考えられます。白鳥を神の化身とすることは、世界に広く見られることです。ただ、奄美、沖縄の場合、ノロなどのカミンチュ(神人)が、決まって白い着物を着ることを忘れてはなりません。(『奄美シマウタへの招待』(小川学夫著参考))



⑪

【ぬ】

古 なに「何」なぜ。なにゆえ。おもに歌に用いられる。

警告 「ぬ」古典語「なに」「何」が変化したものです。「ぬが」「何故」「何で」「ぬば」「何を」「ぬぬ」「何の」という使い方があります。

⑫

【な】

古 な「汝・已」話相手をさすことばです。おまえ。あなた。

例 古事記(712年)「山処の一本薄項傾しなが泣かさまく朝雨の霧に立たむぞ」

⑬

【あんま】

古 (1)あば「阿母」母を親しんでいう語。おかあさん。(2)あも「母」

例 水流雲在桜集(1854年)「題新宮涼庭西遊日記後嘗聞胎教日、あば故虔祈」日本書紀(720年)「道に闘あふや尾代をしろの子あもにこそ聞えずあらめ国には聞えてな」

警告 「あんま」奄美古典語で「吾(あん)+母(ま)」とも云われています。古典語の阿母と違うともいわれています。

朝花節 あさばなぶし

一、ハレカナー

朝花 はやりぶし

ヨイサ ヨイサ

ヨイサ ヨイヨイ

うたぬ始まり イーヤーイー

朝花はやりぶし

「朝花はやり節」は
とてもいい唄ですよ

二、ハレカナー

① うち出さんな ② やり出さんな

島よ一番 村一番よ

うたやあるなりじやが

うち出さんな やり出さんな

三、ハレカナー

③ なきやとうや ④ まれまれどう

花よ花よ みかんぬ花よ

互ぐえまれまれじやが

⑤ タさり夜や ⑥ 遊でいたばれ

「朝花はやり節」は
とてもいい唄ですよ

いのちのつたて

「朝花節」は奄美の各地で唄われているんだけど、地域で歌詞や節回し（メロディの高低）が少しづつ違うんだ。この歌詞は、笠利町で歌われている「朝花節」の一節だよ。

みんなが集まって唄遊び（僕の時代は、隣近所の家から三味線の音がよく聞こえたんだよ）するときの声慣らしの唄として最初に歌われるんだ。

朝花節には、「朝花はやり節」「はやり節」「一切り朝花節」「一切り節」などといういろいろな呼びかたがあるからおぼえておいてね。



① 【うち出さ】

古 うちいず「打出」声をあげて唱える。

例 竹取物語（9世紀末頃）

「さきさきも申さんと思ひしかども（略）さのみやはとて、うちいで侍りぬるぞ」

③ 【な】

古 な「汝・己」話相手をさすことばです。おまえ。あなた。

例

古事記（712年）「山処の一本薄項傾しなが泣かさまく朝雨の霧に立たむぞ」

② 【やり出さ】

古 やりだす「遣出」ある動作をしはじめる。行ないだす。

例

宇治拾遺（13世紀前半頃）「牛舎を七条の末にやりいだししたれば」

④ 【まれまれ】

古 まれまれ「稀稀」きわめてめずらしい。めったにない。

例

伊勢物語（10世紀前半）「まれまれかの高安に来て見れば」

⑤ 【タさり】

⑦ 【南ぬ風】

四、ハレカナ

吹ちゆれいよ ^⑦ 南ぬ風

吹けよ ふ 南風 みなみかぜ

吹けいよ吹けいよ

大和ち吹けいよ

^⑧ 大和山川がでい
吹ちゆれいよ 南ぬ風

やまと やまがわ
大和の山川まで
吹けよ ふ 南風 みなみかぜ

ちよつとひと休み

「朝花」は「若く、浅い（尻軽な）娘」のことをいうんだよ。徳之島の島唄の歌詞によく残っているよ。「朝花節」は唄遊びの習慣らしや座を清めるための曲として、集まりのはじめに歌われるんだ。歌詞はあいさつから人生訓、恋のくどき文句までいろいろだよ。このことを奄美では「歌半学」（島唄を知れば学問を半分やったのと同じ）というんだ。

「朝花節」に関する南日本新聞の記事を紹介するね。

「笠利町中央公民館の民謡教室で前田和郎さん（笠利町佐仁）は、「朝花節」をめぐって忘れられない光景が心に焼き付いている。15年程前、80歳になったブラジル移民のおじが50年ぶりに佐仁に里帰りした。そして沖繩に移り住んだ同郷の親友に電話をかけた。「稀稀（まれまれ）汝（な）きゃ拝（うが）で」（ま

れなことに久しぶりにお会いしました）。「もしもし」とい

う代わりに朝花節の一節を朗々と歌い始めたのだ。おじは受話器を握りしめたまま泣いていたといいま

す。（南日本新聞社『奄美本土復帰50年企画島唄の風景第2部2002/10/02』掲載より）」



昔の船出（南島雑話から）

「南島雑話」とは

「南島雑話」とは、薩摩藩の名越左源太（なごや さげんた）が、流刑中に奄美の自然や生活・文化について詳しく図解で残した著書のことです。

名越左源太（なごや さげんた）は、薩摩藩の上流の武士でした。文武両道にすぐれ、和歌や書画のほか、医術や本草学にも通じていた教養人でもありました。

嘉永2年（1849）に起きた薩摩藩のお家騒動（高崎崩れ、お由羅騒動）に連座した責任で、5年間にわたり流刑に処せられ、奄美大島の小宿集落に流されました。

（奄美市立奄美博物館蔵）

⑤ 【タさり】

古 ゆうさり【タ去】夕方になること。また、その時。夕方。時刻。

例 古今和歌集（10世紀前半）
「あめのいたうふりければ、ゆふさりまで待りて、まかりいでけるをりに」

⑥ 【たぼり】

古 たぶ【賜・給・食】その動作の主を尊敬する意味を表わすことばです。

例 万葉集（8世紀後半）「たぶ↓たばう↓たまう」に変化したとの説もあります。「吾が聞きし耳によく似る葦の末の足ひくわが背つとめたぶべし」

⑦ 【南ぬ風】

古 「はえ」沖繩で南の方をいう。また、西日本一帶で南風のことです。

⑧ 【大和山川】

古 現在の鹿児島県指宿市山川のこと。

いそ加那節 かなぶし

一、梅仁志主 うめいにししゆ ヤレ

② 何処 だ かちが ヨイ 行もゆる ③ う

梅仁志主 うめいにししゆ

どこへいらっしゃるのですか
梅仁志さまよ うめいにし

スラガヨイヨイ 梅仁志主 うめいにししゆ

④ 花 はな くれいが ヤレ

花をあげに はな

⑤ いそ加那 かな ヨイ 墓行じ はかい

いそ加那の墓に行つて かな はかい

花 はな くれいが

花をあげに はな

スラガヨイヨイ 花 はな くれいが

このうたについて

奄美大島南部の瀬戸内町古志集落に住んでいた梅仁志という人を歌った唄だよ。梅仁志は江戸後期〜明治時代の人で、大変なお金持ちだったそう。思いやり心が豊かな人で、恋人、いそ加那が亡くなった後は、毎日欠かさず馬に乗って、隣の集落にあるいそ加那の墓参りに行つたと伝えられているんだよ。



① 【主】 しゆ

古 しゆ 【主】立場が上の人。自分が仕える人。

例 律（718年） 賊盗「凡家人奴婢、謀殺しゆ者皆斬」

【主】奄美の上層階級（ユカリツチュ）の男性に付いた尊称です。

② 【何処・かち】 だ

古 だ 【何処・何所】（はつきりしない場所をさすことばです。どのところ。

例 将門記承徳三年点（1099年）「どこにか往きとこより来りて誰が家に宿る」

【何処】「方向の「どこ」から【徒】方向・距離の「まで」を表します。

「だがち」が変化して「だち」（どこまで）という表現があります。

（「奄美シマウタへの招待」（小川学夫著参考））

ちよつとひと休み

梅仁志さんの唄は、いくつもあるんだよ。梅仁志さんが馬に乗ってたことが「くるだんど節」にあるから紹介するね。

「梅二志主

馬にだん鞍^{くら}かけて

何処^{どこ}かちがうもゆる

梅二志主

吾^わ加^か那^な見^みりが

篠^{しの}川^{かわ}くみきち

深^{ふか}浦^{うら}ぬ作^{しや}場^ばかち

吾^わ加^か那^な見^みりが

梅二志主

馬に鞍^{くら}をかけて

何処^{どこ}へいらっしゃるのですか

私の愛^{あい}しい人に逢^あいに

篠^{しの}川^{かわ}の急^{いそ}坂^{さか}を踏^ふみ越^こえて

深^{ふか}浦^{うら}の作^{しや}場^ばにいる愛^{あい}しい人^{ひと}（いそ加^か那^な）に

逢^あいに行^いきます

注・いそ加^か那^なの生前、梅二志主が彼女のもとへ通い詰^とめていたころの唄^{うた}と思^{おも}われる

（『奄美島唄ひと紀行』（初^{はつ}芳^{ほう}晴^{はる}著^{しやう}参考^{さんこう}））



お金持ちの馬のり光景（南島雑話から）

③【行もゆる】

古

いえます「出座」「行く」のていねいな言い方です。お出になる。お出かけになる。

例

日本書紀（720年）「皇后、紀国に遊いでまして熊野岬に到りて」

⑤

【加那】

奄古

「かな（加那）」「愛しい人」つまり「恋人」と「○加那」のように愛称として当て字で使われることがあるようです。

④【くれいが】

古

くれる「呉」人または動物に物を与える。

例

土佐日記（10世紀前半頃）「この長櫃のものは、みな人、わらはまでにくれたれば」

奄古

「呉（く）りゅん」「（私に）呉れる」でも、「（人に）あげる」の意味でも使われます。（沖永良部島の場合）

嘉徳なべい加那節 かどく なべい かなぶし

一、ハレーイ

嘉徳なべい加那や かどく なべい かなや

如何しやる生れしつちが いきや う

スラヨイヨ

嘉徳なべい加那は かどく なべい かなは

どんな生まれをしたのだろう う

ハレーイ

親に水汲まち うや おいずい

座ちゆてい浴むいろ い ④ ⑤ あ

スラヨイヨイ

親に水を汲ませて おや みず

自分は座って水を浴びている じぶん すわ みず あ

二、ハレーイ

なべい加那が死じやる なべい かなが し

声聞けいば こゝろ

なべい加那が死んだという なべい かなが し

うわさを聞いたなら き

このうたについて

嘉徳は奄美大島南部、瀬戸内町の集落名だよ。この唄の解説は、いろいろあるんだ。なべい加那は集落の祭祀（祭りや行事）を取り仕切る女性シャーマン（霊力の高い女性）もしくはノロ（琉球王朝時代に制度化された神に仕える女性）で、両親もなべい加那を神として尊敬して、水汲みもさせないように大切に育てたという解説、なべい加那は足が悪くて歩けなかったという解説もあるんだ。それで両親に水をくんでもらって水浴びした両親に苦労させたという解説もあるんだ。なべい加那が少しかわいそうだね。



①【加那】 かな

【古】かな「加那」「愛しい人」つまり「恋人」と「〇〇加那」のように愛称として当て字で使われることがあるようです。

③【如何しやる】 いきや

【古】いかなる「如何し」どんな。どういふ。強める言い方です。

②【や】

【古】「や」呼びかけを表わすことばです。
【例】万葉集（8世紀後半）「天さかる部も治むる大夫や何かもの思ふ」

④【座ちゆる】 い

【古】いる「居」低い姿勢をとる。腰をおろす。すわる。
【例】万葉集（8世紀後半）「立ちていて見れどもあやし」

⑤【浴むいろ】

⑦【一七日】

スラヨイヨイ

ハレーイ

みきや^⑥みき^⑦つく
三日や御神酒造てい

⑦ちゆなんかあす
一七日遊ぼ

スラヨイヨイ

みっかおみきつく
三日は御神酒を造つて

なのかし
七日は死をいたんで休もう

(葬送の神遊びをしよう)

ちよつとひと休み

この歌に登場する「なべ」さんという女性については、いろんな説があるんだ。ちよつとむずかしいことは出てくるけど紹介するね。

「親に水を汲ませて、自分はいながらに浴びる親不孝な娘、これが今でも多くなべ加那のイメージに変更を迫る論文があります。奄美民族の研究者、金久正氏の「奄美に生きる日本古代文化」に収められたものによると、なべ加那は親でさえあがめるような神高い神女だったといっています。つまり今までの人は「親に水を汲ませる」ということの表面的な解釈だけで大きな誤解をしてきたというわけなのです。実は、なべ加那を親不孝とみなす理由がもう一つありました。歌詞の中に「遊ぼ」とありますが、親不孝者が死んで盛大な祝いをしたというものです。しかし、これにも金久氏は反論する。「いわう」というのは広く神まつりをいいました。これは高名な神女の葬送のまつりだったのだと。歌の解釈はよくよく注意しなければいけないという好例です。

(『奄美シマウタへの招待』(小川学夫著参考))



⑤【浴むいろ】

古 あむ「浴」湯や水などをあびる。あびる。

例 古今和歌集(10世紀前半)
「源のさねが、筑紫へ湯あみおとてまかりける時に」

⑥【御神酒】

古 みき「神酒・御酒」酒をほめていう言い方です。おおみき。おみき。

例 古事記(712年)「このみきは我がみきならず」

⑦【一七日】

古 ひとなぬか「一七日」人の死の七日目にあたる日。初七日。

例 独吟一日千句(1675年)「今ははやなきひとなぬか時鳥へ一永」

奄古 「一」の後に単位をつけると「チュ」と発音します。ひとつ(ッティチ)、一人(チュリ)、一日(チユイ)など。



江戸時代のノロ(南島雑話から)

むちや加那節 かなぶし

一、ハレイ きかい 喜界や小野津ぬ おのつ

ヤレ とうば 十柱や

スラヨイヨイ

十柱 とうばや ①むちや加那 かなよ

スラヨイヨイ

ハレイ あおさぬり② 青海苔 あおのりはぎが

ヤレ ③参 まうもろう

スラヨイヨイ

参 まうもろう かなむちや加那 かなよ

スラヨイヨイ

きかい 喜界は おのつ 小野津の

じゅっぽん 十本ガジユマルのある家 いえの

じゅっぽん 十本ガジユマルの むちや 加那 かなよ

あおのり 青海苔採 とりに

行 いこうよ

行 いこうよ かなむちや加那 かなよ

このうたについて

薩摩藩時代、加計呂麻の生間集 いけんま 落 おちにウラトミという美しい女性がいたそう うただ。ある時、ウラトミに一目ぼれした薩摩役人 さつまやくにんが、島のと うじうじ（現地妻）になるように言ったんだって。ウラトミが嫌 きらがったので、両親はかわいそうになりウラトミを小舟に こふね乗せて、海に流 ながしたそう うただ。その船は、海を渡 わたり、喜界島の小野津の村に流 ながれ着 きいたそう うただ。ウラトミは村の男と結婚して、「むちや」という女の子ができたそう うただ。成長 せいしょうしたむちやは、とても美 うつくしかったんだって。そのため、美貌 びようぼうをうらやましく思 おもった村の娘 むすめたちが、一緒に青海苔 あおのりつみ出 でかけた時に、海に突 つき落 おちとしたんだって。そんな、かなしい唄 うたなんだよ。けど、その他にもたくさん おほの言い伝えがあるから うたね。



喜界島小野津集落「ムチャ加那公園」

ちよつとひと休み

「ムチャ加那節」には、いくつかの伝えがあるんだって。ここで、もう一つの「ムチャ加那」伝説を紹介するね。

瀬戸内町生間に伝えられているムチャ加那伝説。

「昔、生間に大変美しい娘「ムチャ加那」がいました。ちよつとそのころ、島の農地で薩摩藩による竿打ち（検地）のために来島した役人たちはアング（島妻）を所望していました。ムチャ加那の両親はアングの話を嫌い、断ってしまいました。両親は娘を島外に送ることを決心、ある夜、供の者をつけた小舟で送り出しました。不運にも船が途中で難破、ムチャ加那だけが喜界町小野津に流れ着きました。喜界でのムチャ加那は地元青年と結婚、人もうらやむ幸福な生活を送っていました。娘が喜界で健在なことを知った母アハバ加那は現地を訪ね、材木を送り立派な家を建てさせました。ところが、ムチャ加那は村の娘たちの嫉妬心の対象にされ、ある日アオサ摘みに誘い出されて海に突き落とされ溺死してしまいました。一方、母アハバ加那は喜界への往復の途中、船が難破して水死、遺体は住用村青久に打ち寄せられました。青久の人たちは、その死を悼み、墓地をつくって霊を祀りました。うらとみはムチャ加那の母ではなく、ムチャ加那の哀話を歌って門付け（人家の門の前に立って行う芸能）をした回りゾレ（村々港々を遊行する遊女）だった。

（『奄美島唄ひと紀行』（初芳晴著参考））



さつま時代の接客風景
（南島雑話から）



奄美市住用町青久集落の「おちゃ加那の碑」

①【加那】

奪かな「加那」「愛しい人」つまり「恋人」と○○加那のように愛称として当て字で使われることがあるようです。

②【はぎ】

古はぐ（剝禿）離し取る。表面の部分をむき取る。はがす。

例万葉集（8世紀後半）「あしひきのこの片山のもむ檜を五百枚はぎ垂れ天光るや日の気に干し」

③【参もろう】

古まいる「参」「行く」「来る」のていねいな言い方です。

例徒然草（14世紀前半頃）「ここにて対面し奉らば、道場をけがし侍るべし。前の河原へまいる合はん」「打ち」＋「参る」うもろう。「打ち」（動詞について）力強い動作、念入りな動作など種々の意味を表わすことばです。また語調をととのえる。すっきり。思い切って。